

敦煌莫高窟北朝期尊像の図像的考察

東 山 健 吾

敦煌文物研究所の統計によると、莫高窟に現存する北朝期造営の窟龕は、北涼三、北魏八、西魏一〇、北周一五で、合計三十六窟を数える。⁽¹⁾これらの北朝期の窟龕のうち、窟内中央に方柱を鑿り出したいわゆる塔廟窟（中心柱窟）と方形プランの伏斗形天井窟が過半数を占めている。窟の本尊は、塔廟窟の場合は方柱の東面、すなわち方柱の正面に開かれた大龕に造られ、伏斗形あるいは前部人字披後部平頂の方窟と縦長窟の場合は正面（西壁）に安置されているが、付表一に示したように、その圧倒的多数が倚坐の如来であることは注目される。このような現象は、中国にある他の北朝期の石窟には、類例のないこと

である。しかも、如来形の交脚像があり、菩薩形の交脚像もある。二佛並坐像もある。これらの本尊に、禪定印を結ぶ結跏趺坐佛、交脚菩薩、思惟菩薩などの諸尊が配され、影塑の天部がとりまき供養する。窟の天井と四壁には壁画が描かれ、これら尊像と一体となつて、敦煌の人々の佛教世界を形づくっていたのである。

本来、寺院の本尊は信仰の中心であり、その内容を明らかにすることが基本であることはいうまでもない。敦煌莫高窟の研究は、従来壁画の内容の考察が大きな成果をおさめているが、不思議なことに、窟本尊の内容について正面からとりあげた論考はなかった。ここに、特に

北朝期の石窟をとりあげ、本尊とそれととりまく造像の内容について考察したい。

一

北涼時代とされている石窟のうち、第二七五窟には、西壁に本尊交脚菩薩がつくられている。まずこの尊名について考えてみよう。交脚の菩薩像は、インド亜大陸においてはガンダーラではじめて出現した。サフリ・パロール出土の菩薩立像の台座正面に浮彫としてあらわされている⁽³⁾ほか、モハマッド・ナリー出土のいわゆる「舍衛城の大神変」⁽⁴⁾といわれる釈迦説法の中層両側の円蓋堂内に、小型の菩薩交脚像がつくられている。サフリ・パロール出土の菩薩立像は、高さ一五三センチ、裳をまとうのみで、裸形の上半身には肩に天衣をかけ、頸飾、胸飾、臂釧、腕釧などの装身具をつける典型的なガンダーラの菩薩像である。束髪式の髪型、左手は腕先から缺けるが、浄瓶⁽⁵⁾を持っていたことがわかる。この形式の菩薩は、一般に弥勒菩薩と認められているが、それが比定し得るなら、前述の菩薩の台座に交脚菩薩が表わされていること

は、少なくともこの交脚菩薩が弥勒と関係があることになる。説法の釈迦を中心に多数の菩薩や円蓋の堂屋を配する彫刻も、前述の例に止まらないが、堂屋内の交脚菩薩像を、弥勒菩薩と考定する積極的な決め手はない。ガンダーラに近いアフガニスタンの、バーミヤン石窟には壁画に描かれた交脚菩薩像がある。この石窟の東西二つの大佛立像龕はよく知られているが、大小合わせて七五〇以上の窟龕があり、方形または八角プランにドーム形天井をのせる窟と、長方形プランにヴォールト天井をもつ窟が多い。壁画は剝落が著しいが、残存する断片的な壁画から、その原形をたどることができる。比較的保存の良い第二四窟を例にとると、方形プランのドーム天井の中心に二重の同心円があり、外円の十数体の坐佛が大きな内円の菩薩坐像を囲んでいる。この菩薩は右脚をややくずした坐勢で交脚に近い。印相は転法輪印らしく、持物はない。同形の窟、第三八八窟にも天井ドームの中心に菩薩坐像が描かれている。外周には九体の坐佛がとりまいている構成だが、この菩薩坐像の坐勢はあきらかに交脚であり、右手は施無畏、左手に浄瓶を持つ。また、第

三三〇窟は長方形のプランにヴォールト天井をもつ窟であるが、天井にはヴォールトの主軸を中心に、三列の円輪図形が五つ並んでいる。この円輪図形は、小円内の六坐佛が一坐佛をとりまく七つの小円からなっているが、中央の列の奥にある一円輪だけが大きな菩薩坐像である。この菩薩は右手を胸前に挙げ、左手に浄瓶を持っている。ガンダーラの菩薩を例にすれば弥勒菩薩である。官治昭氏はバーミヤーン石窟の天井中央部に描かれた菩薩像の特徴から、弥勒菩薩と推定している。⁷⁾次に、中央アジアに目を転じよう。中央アジア各地に散在する佛教遺跡は近世以降かえり見られることがなかったため、とりわけ完好な尊像はほとんど現存しない。交脚菩薩像ではわずかにキジル石窟第七六窟(孔雀窟)出土の菩薩交脚像が知られる。⁸⁾高さ二十三センチの小像にすぎない。一方、このキジル石窟には、壁画におびただしい数の交脚像が見出される。もっともこれらの交脚像は必ずしも菩薩に限らず、本縁説話中に登場する人物をはじめ、弟子、天部さらに佛陀まで、いとも自然に脚を交叉させており、この地域の生活習慣が、佛教壁画に色濃くあらわ

れていることがわかる。しかし、ここで注目したいのは、バーミヤーンと同じ様に、画面の中心となっている持瓶の交脚菩薩像である。キジル石窟には、いわゆる中心柱窟がある。このタイプの窟は通常前室と主室、後室をもち、主室は、縦方向の長方形プランにヴォールト天井を架し、正壁には龕を設けて主尊を置く。後室は、主室の正面龕の両側にある左右廊によって連絡され、後廊の奥壁には涅槃佛を置く牀台を設ける。交脚菩薩は、主室の前壁入口上部の半円形の壁面中央に大きく描かれている。これは、主室の正壁龕本尊と向い合う位置である。第十七窟の交脚菩薩は、方座に交脚で坐り、右手を挙げ、左手には浄瓶を持つ。菩薩の頭上には、アーチ形の建築装飾が描かれ、菩薩の両側には、それぞれ五体の天衆が説法を聴く。これとほとんど同じ構図の、天衆に囲まれて右手を挙げ、左手に浄瓶を持つ交脚菩薩の片岩の浮彫が、ガンダーラのチャールサダから出土しているのが注目される。⁹⁾キジル石窟では、いわゆる中心柱窟の主室前壁に、多くの場合、天衆に囲まれた交脚菩薩を描くが、主室左右壁の上層には、横一段にアーチ形を並べて、中

に伎楽天を配している。龕の下にはバルコニーを描き出したり、塑造で立体的に造ったりしており、伎楽天が天宮で器楽を奏していることを表わしている。沮渠京声訳の『観弥勒菩薩上生兜率天経』(以下『上生経』とする)には弥勒菩薩往生のときの兜率天の莊嚴をつぎのように語っている。

このとき、兜率天上には五百万億の天人がいる。弥勒菩薩を供養するため、宮殿をつくり、おのおの宝冠をとって、五百万億の宝宮を化作する。それぞれの宝宮には七重の垣があり、それぞれ七宝でできている。ときに牢度跋提という大神があり、弥勒のために善法堂を造るべく誓願し、額より五百億の宝珠を出す。摩尼の光は空中を旋回して四十九重微妙の宝宮となった。それぞれの欄楯から、九億の天人、五百億の天女を化生し、天樂はおのずから鳴り、天女はもろもろの樂器をとり、競って歌舞する。

この経典は、さらに兜率天宮の莊嚴を描写し、兜率天に往生する者は、自然にこれらの天女にかしづかれると説く。弥勒菩薩は、この兜率天宮におり、昼夜つねに説

法し、諸天を度すという。

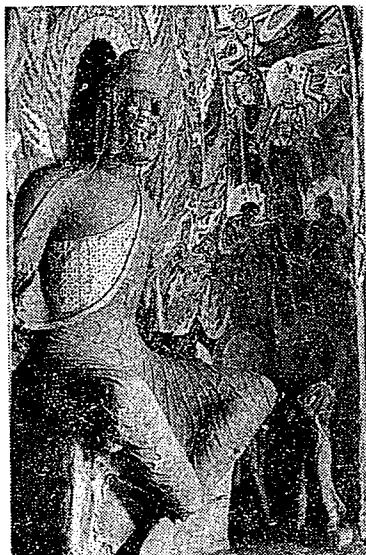
キジル石窟では、いわゆる中心柱窟の主室前壁には、天部に囲繞されて説法する交脚菩薩が描かれる例が多いが、上述の経典の内容とも一致するので弥勒菩薩としてよからう。しかし、キジル石窟では、第三八窟主室前壁に描かれた交脚菩薩のように、左手に浄瓶を持たず、説法印をとるものがある。この窟の兜率天説法の下の前壁上部には、左右にそれぞれ一体の思惟菩薩が描かれている。当初はその間にも菩薩が描かれていたことが、残存する断片からわかるが、これは思惟形ではない。両端の思惟菩薩は、三面冠をのせ、上半身裸形に装身具をつけ、円形の束縛座に坐る。向って右側の思惟菩薩は、右手を頬にあて、右足を左膝の上にのせる。左側の菩薩は左手を頬にあて、左足を右膝にのせ、右側と対称形になる。光背の後は樹木があり、樹下で思惟する菩薩をあらわしている。交脚の弥勒菩薩の左右に思惟菩薩を配する組み合わせは、敦煌莫高窟や雲岡石窟でも多くの遺例が知られるが、アフガニスタンのショトラク出土の片岩浮彫交脚菩薩三尊像¹¹⁾に、そのプロトタイプを見出すこと

ができる。

敦煌にかえろう。第二七五窟は長方形プランに縦長の盤頂をもち、西壁には本尊交脚菩薩像を安置し、左右の南北両壁面上層に、門闕屋形龕を二つ、樹形龕を一つ並べている。屋形龕には交脚菩薩、樹形龕には思惟菩薩の塑像を置く。この形式は、本尊を中心にそれぞれ二体の交脚菩薩、一体の思惟菩薩という統一された構成である。この構成は、キジル石窟第三八窟主室前壁の弥勒および思惟菩薩と同じ構想によるものと考えられる。西壁の交脚菩薩は高さ三・三四メートル、莫高窟北朝期の交脚菩薩では最も大きい。頭には化佛のある冠を戴き、頸飾、腕釧をつけ、体軀には薄手の裙をまとい、裸形の上半身には、鋸齒状の襷のある被巾をはおっている。台座の両側にはそれぞれ一体の獅子がひかえる。菩薩の右手は失われ、左手も後代の補修があり、しかも指が缺けているが、淨瓶を持っていた形跡はない。北魏時代には交脚菩薩の造像例がすくぶる多く、その初期に属する雲岡石窟第十七窟の十六・三〇メートルにおよぶ大交脚菩薩像はその代表例といえるが、惜しいことに破損がいちじるし

い。幸いこの窟の明窓東側には上下に二龕あり、上龕は交脚菩薩、下龕は二佛並坐像を彫り出し、その下に太和十三年（四八九年）銘の造像記がある。⁽¹²⁾ よって上龕が弥勒菩薩、下龕が釈迦・多宝二佛並坐をあらわしていることが知れる。交脚菩薩を弥勒菩薩と明記する例は、その他にも多い。⁽¹³⁾ 龍門石窟古陽洞には交脚菩薩の龕が約四十龕を数えるが、そのうち銘文によって弥勒の尊名が確認できる龕が、三十二龕にも達する。⁽¹⁴⁾ 逆に交脚菩薩の龕で弥勒以外の尊名は一例も無いのである。このように、莫高窟第二七五窟の本尊は、弥勒菩薩として問題ないようである。しかし、高田修氏は、「交脚であるが宝冠に化佛があり、化佛ある弥勒が考えられない以上、それらは弥勒であるよりも観音と見る方が妥当であろう」と述べている。たしかに化佛ある交脚菩薩は、ガンダーラにもバーミヤーンにもない。キジルにも見られないようである。ところが敦煌をはじめ、雲岡でも、単独像でも化佛のある交脚菩薩は少なくない。⁽¹⁶⁾ 『上生經』には次のように説く。

釈迦毘楞伽摩尼と百千万億の甄叔迦宝でかざられた



第254窟 方柱東面龕 交脚佛



第275窟 西壁 交脚菩薩
(平凡社版『中国石窟敦煌莫高窟』一より)



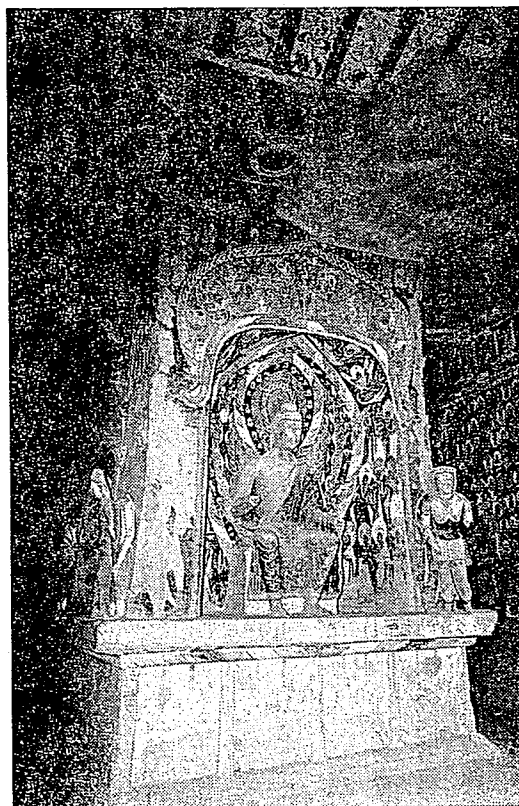
第260窟 方柱東面龕 倚坐佛



第275窟 北壁 半跏思惟菩薩像

天冠がある。この天冠の宝は、百万億の色があり、一々の色中に無量百千の化佛があつて、諸化菩薩を侍者としてゐる。

あきらかに、化佛のあるのは観音菩薩のみではないのである。ただ、中国でも化佛のある交脚菩薩像は六世紀に入ると少なくなるようで、龍門期の弥勒には化佛はほとんど見られなくなる。



第257窟 窟内全景

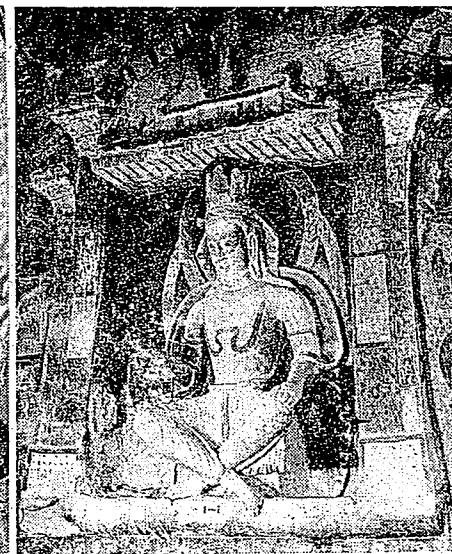
右手を挙げ、左手を下げて掌を前に向けるもの、両手を胸にあてるもの、転法輪印をとるものと印相はまちまちである。右手を挙げ、左手を下げるものは後に施無畏・与願印といわれる印相だが、これは、キジル第三八窟主室前壁の弥勒菩薩が示す説法印の発展形とみることができるので、説法相とすべきだろう。龕内の弥勒菩薩の座の後は、二人の人物が描かれ、それぞれ片手をあげて

獅子座について經典には、兜率天の七天に七宝の大獅子座があつて、座の四角のはしに四蓮華を生ずと説き、さらに、弥勒は兜率天に至ると、七宝台内摩尼殿上の獅子座のうえに忽然と化生すると説いている。第二七五窟に獅子座のあるのは『上生経』のいうとおりである。

南北壁上部に二つつつ並んだ漢式門闕屋形龕にも、それぞれ交脚菩薩を置くが、兜率天宮において天衆のために説法する弥勒菩薩であろう。



第257窟 方柱南面上層 半跏思惟菩薩像



第254窟 南壁上層 交脚菩薩像



第259窟 西壁 二佛並座像

散華しているかのようである。南壁の第二龕の人物は拂子のようなものを持つている。『上生経』には弥勒の宝帳があることを説き、また、百千無數の天人天女の眷属が宝華を弥勒の座に敷き、この諸蓮花は自然に五百億の宝女を出し、手に白拂を執って帳内に侍立すると説くことを描写したものであらう。

二

第二七五窟にある闕形龕は、莫高窟の北朝期の窟に合計二十五窟現存するが、尊像が失われた二窟を除く二十三窟のうち二十窟までが交脚像であり、わずか三窟のみが思惟像である。第二七五窟にも半跏思惟像があるが、この思惟像は樹形龕に置かれている。この思惟像は何を表わしているのだろうか。思惟菩薩像は、一般に交脚菩薩と組み合わせて表わされることは前にも述べたが、雲岡石窟では思惟菩薩を交脚菩薩の左右に一対向いあわせて、脇侍的なあつかいをする三尊形式が多数見られる。注意すべきは、半跏思惟像を脇侍的に配する場合は、本尊が交脚菩薩か佛倚像に限られることである。⁽¹⁷⁾ 思惟菩薩

が交脚菩薩と如何に密接なかかわりがあるかを物語るものといえよう。

半跏思惟像の尊名は、日本では一般に弥勒菩薩と称している。これは、天智天皇五年（六六六年）作と考えられる大阪野中寺の半跏思惟菩薩像に「弥勒御像」と刻銘されていることに根拠があるようである。

中国の半跏思惟像はどうであらうか。半跏思惟像で銘文のある最も早い例は、北魏太平真君三年（四四二）銘のものであるが、「為亡母王造尊像一軀」とあるのみで、尊像を特定することはできない。次に、北魏太和十六年銘の石造半跏思惟像がある。これは、尖拱龕の中に如来形の半跏思惟像が真中に彫られ、その向って左には馬がひざまずき、その後に人物が身をかがめて立ち、思惟像の右には合掌する比丘と供養者が彫られている。台座前面の銘文には、「太子□惟像」とあり、太子と愛馬カンタカの別離をあらわしたことが知れる。このような作例は、雲岡石窟第六窟の明窓西側にも見られる。この窟は、全体が佛伝を主題としているので、太子思惟であることはあきらかである。さらに時代が下ると、六世紀の

前半の北魏末より、河北省曲陽県を中心に白玉製の小形単独像が大量につくられるようになるが、東魏から北斉にかけて、とりわけ半跏思惟像が流行している。これは、一九五四年三月から四月にかけて出土した、河北省曲陽県修德寺址の白玉像の状況と一致する。⁽¹⁸⁾ これらの白玉製半跏思惟像の銘文には、「玉思惟」「思惟像」「太子像」「太子思惟像」「龍樹思惟像」などがあるが、弥勒の尊名は一点もない。周知のとおり成道前の釈迦は、四門出遊して人生の諸苦からの解脱の道を思惟し、閻浮樹下に観耕して思惟し、出家前に宮中歓楽に疲れて眠る宮女を見て思惟し、踰城後苦行林に至った太子が愛馬に別れを告げて思惟する。白玉の思惟像の一部は、成道以前の悉多太子の姿を表現したものに違いない。このように、悉多太子をあらわした樹下思惟像があるのは当然であるが問題になるのは龍樹思惟像である。鳩摩羅什訳『弥勒下生成佛経』（以下『下生経』とする）は、閻浮提下生後の弥勒菩薩が、蟻佉王の奉ずる宝台を諸婆羅門に施したところ、諸婆羅門は宝台を毀して分けてしまった。弥勒はそれを見て、一切法も皆磨滅することを知り、無常想を修

し龍華菩提樹下に坐したと説く。⁽²⁰⁾ 鳩摩羅什訳『弥勒大成佛経』（以下『成佛経』とする）は、弥勒無常想を修して出家学道し、金剛莊道場の龍華樹下に坐したことを述べ、続いて龍華樹について描写している。枝は宝龍のように百宝の華を吐き、一々の花葉は七宝の色をし、さまざまな果実が成って衆生の意にかなうともいい、このような樹は、天上界にも人間界にもないという。⁽²¹⁾

白玉半跏思惟像の背後には、双樹を配したものがあ。修德寺出土の例では、東魏武定五年（五四七年）即頭造思惟像が最も早く、尊像の頭光の背後には、透彫の龍華双樹と樹幹に龍と蓮華托生などをあらわしている。

「枝は宝龍の如く」という『成佛経』の龍華樹であらう。ところで、北魏皇興五年（四七一年）仇寄奴造金銅佛立像の光背には、樹下に思惟する菩薩像が浮彫りされているが、この像の台座に刻られた銘文は、樹下半跏思惟像と弥勒信仰の關係に示唆を与えてくれる。すなわち、父母が上生して天上諸佛にあい、弥勒下生に際しては人間界の王侯長者の家に生まれることを願うという、追善的な上生信仰と下生信仰をあわせもつ、弥勒信仰特有な内容

となつてゐる。すなわち光背の樹下半跏思惟像は、弥勒下生後の龍華樹下の思惟をあらわしたものに違いない。このように、半跏思惟形の菩薩は、悉多太子思惟をあらわすだけではなく、弥勒思惟の姿をあらわしたのであろう。これは、中国の北朝期の結跏趺坐あるいは立像の如来が、必ずしも釈迦如来とはかぎらないのと同様である。

半跏思惟形が最初に出現したのは、ガンダーラのように、松岡美術館の半跏思惟菩薩像⁽²³⁾はその代表例といえる。左足を右膝の上にのせ、右手を傾むけた顔に近づけ、左手を下して蓮華を持つ姿で、あきらかに半跏思惟形である。このような像容は他にも数点知られている⁽²⁴⁾。前出のモハマッド・ナリー出土の釈迦説法には、釈尊を中心に、自由な姿態の菩薩と諸天が多数取りまいており、その中には思惟形像が二体見える。釈尊の両側に上下四つあるアーチ形建造物の上段にあり、上段が思惟形、下段が交脚であるが、思惟像の脚の組み方は膝をひろげて片足を台にのせるもので、典型的な半跏ではない。一方、ベシヤーワル博物館には、ほとんどこれと同タイプの釈

迦説法図があり、アーチ形の中の思惟菩薩は典型的な半跏であるのが注意される。すなわち、ガンダーラでは半跏思惟の形式がまだ流動的であることを示している。ガンダーラや、アフガニスタンのジャラーラーバード周辺でつくられた釈迦説法相や弥勒説法相の石彫には、往々にしてこのような思惟相の像が左右に対称的にあらわされているが、これは、釈迦や弥勒の説法を聴く、菩薩あるいは天部が定形化したものと考えられ、特定されたものではなからう。しかし、思惟形が兜率天の弥勒説法像の左右にあるときは、兜率天説法を聴く天衆とすることができ。この不定形だった説法を聴く天衆が、キジル石窟を経て中国に入り半跏思惟像として定形化され、天宮中の交脚菩薩の左右に侍り、兜率天の弥勒菩薩説法の一形式となるのである。敦煌莫高窟北朝窟に見られる関形龕中の半跏思惟菩薩は、その過渡的存在といえるのではなからうか。

三

付表一「敦煌莫高窟における本尊とその他の造像の形

式」にあげられた三十窟から本尊の形式をみよう。倚坐佛が二十四窟、交脚佛が二窟、結跏趺坐佛が二窟、二佛並坐と交脚菩薩が各一窟である。

交脚坐は倚坐像の一種と仮定すれば、北朝期三十窟中実に二十六窟の本尊が倚坐佛ということになる。交脚坐の菩薩については、兜率天上において下生を待機中の弥勒であることがわかったが、交脚坐の如来はどうであろうか。交脚の弥勒菩薩に準じてこれを弥勒佛とする考え方が多いようである。付表一は、一、二の例外はあっても、大体窟造営の先後に順って排列したもので、これによって、交脚佛は並脚の倚坐佛と比べて早い時期、すなわち五世紀前半から五世紀末にかけて出現していることがわかる。敦煌地区以外では、雲岡石窟、義泉万佛洞に造られ、陝西省でも数点の単独像が知られる。なかでも雲岡石窟には遺品が多いが、それでも第七・八窟、第九・十窟、第十二窟に限られている。これらの窟は、天安、皇興年間（四六六—四七〇）頃から太和十八年（四九四）頃までの造営によるものである。雲岡では第七窟の東壁第三層北龕の交脚佛とそれに対応する西壁第三層北龕の交脚

佛、第八窟東壁の交脚佛が最も早く、洛陽遷都後に造営された窟には一体もない。交脚佛は龍門石窟など六世紀以降に造営された石窟にはほとんど見られない。交脚佛の単独像も遺品は少なく、陝西省で造られた数点と、河北省定県白玉像が知られるにすぎない。

単独像の交脚佛の造像例については、陝西省博物館蔵の『石刻選集』には三点の石彫交脚佛造像を収録し、そのすべてを弥勒像としている⁽²⁵⁾。劉保生等造弥勒像には、台座正面に明瞭に弥勒像の刻銘があるので問題はない。

しかし、北魏皇興五年（四七二）銘の石彫佛交脚像と石彫碑像「弥勒弥勒造像」⁽²⁷⁾には、銘文中に尊名を確定できる記述は無いので、陝西省博物館は劉保生等造弥勒像に準じて「弥勒造像」としたものとと思われる。陝西省博物館には造像のほか、北魏普泰元年（五三一年）「釈迦牟尼造像」⁽²⁸⁾の背面に交脚佛が造られており、陝西省では倚坐佛の形式が他の地方より好まれたもののようであり、また流行も北魏末に及んでいることは注目される。もっとも、交脚佛は六世紀後半に至って河北省定県様式の白玉像の遺例がまれにある。現在クリーブランド美術館蔵に

付表一 敦煌莫高窟北朝期窟における本尊とその他の造像の形式

[illegible]

北										周				西		魏	
301	299	297	296	294	442	250	291	290	430	428	440	439	438	432	285	288	249
伏斗形方窟	伏斗形方窟	伏斗形方窟	伏斗形方窟	伏斗形方窟	塔廟窟	平頂窟	伏斗形方窟	塔廟窟	前部人字披後部平頂窟	塔廟窟	人字披頂窟	前部人字披後部平頂窟	伏斗形方窟	塔廟窟	伏斗形方窟 (禪定窟)	塔廟窟	伏斗形方窟
倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛	倚坐佛
					方柱			方柱		方柱			方柱下層	方柱上層	西壁	方柱上層 方柱下層	
					南面凹券龕倚坐佛、 西面凹券龕交脚菩薩、 北面凹券龕倚坐佛			南面凹券龕倚坐佛、 西面凹券龕交脚菩薩、 北面凹券龕倚坐佛		南面凹券龕跌坐佛(說法印)、西面凹券龕跌坐佛(說法印)、北面凹券龕跌坐佛(說法印)			南面凹券龕禪定佛、 西面凹券龕苦修像、 北面凹券龕禪定佛	南面段上禪定佛、 西面段上禪定佛、 北面段上禪定佛	本尊凹券龕兩側に凹券龕禪僧像各1	南面凹券龕禪定佛、 西面凹券龕禪定佛、 北面凹券龕禪定佛	

注 北朝期の36の窟龕のうち、第487窟は造営当時の尊像がすべて毀損し、第263、265窟は、五代・西夏時代の重修のため尊像の原状が著しく変わっているのて表に含まれていない。また、人が入れない程の小窟・小龕第273、286、247窟も表から除外した。

ある石造交脚五尊像は、透し彫りの双樹の下で説法する交脚佛を本尊とし、背面には佛説法坐像と半跏思惟菩薩をあらわし、樹上には飛天、化生佛、樹葉などを細かく彫り出している。龍華樹説法をあらわすとすれば、この交脚佛は弥勒佛である。陝西省博物館蔵の景明二年および普泰元年四面造像も、正面の釈迦造像に対応する弥勒佛の可能性が大きい。

雲岡石窟の交脚佛についても、尊名をあらわす銘文がない。水野清一、長廣敏雄両氏の「雲岡図像学」⁽³⁰⁾はこの交脚佛にふれ、「交脚佛は第七、第八洞、第九、第十洞、第十二洞にかぎられている。そのうち第九、第十洞、第十二洞では、前室上層において交脚菩薩とむきあっている。だから、これは交脚菩薩に調子をあわせるための姿態だと解される。……（交脚佛は）けっして中心龕にはあらわれない。なにか照応する佛龕がかならずある。それをみると、おそらく造形的変化をつけるためであったとおもわれる。」

このように、石窟造営にあたり構成に造形的配慮がなされることが多い。敦煌でも壁画の千佛構成に、色彩に

よる変化をつけている。しかし、雲岡の第七、第八窟などの窟にみられる交脚佛は、ただ単に造形的変化をつけるためにのみとどまらず、佛教的内容の前提があるよう⁽³¹⁾だ。

雲岡石窟の前述の窟において、東西両壁の照応する壁龕で交脚佛と交脚菩薩が造られたとき、佛教内容のうえでは少なくとも二つの可能性があると考えられる。すなわち釈迦佛と弥勒菩薩の継承関係を強調する意味から釈迦佛を交脚形式にした場合と、下生成佛後の弥勒佛と兜率天の弥勒菩薩を共に交脚であらわした場合とである。

交脚菩薩と交脚佛を照応させることはどこまで遡るかわからないが、少なくともキジル石窟にその先蹤がみられる。キジル石窟のいわゆる中心柱窟は、前室の後に縦長ヴォールト天井の主室があり、主室正壁の左右廊を通過して横長ヴォールト天井の後廊がある。⁽³²⁾修行僧が前室から主室に入ると、左右の壁画には因縁・佛伝図が展開され、天井にも本生・因縁図が描かれて、釈迦の前世と現世における徳行を目にすることができる。正壁の中央には龕が鑿られ、釈迦の尊像は塑成されていた。その上部

は一般に影塑による菱形の山岳があらわされる。説法や降魔変相が描かれる例もある。左廊を通過して後廊に行く⁽³³⁾と、その奥壁には釈迦涅槃図を描く。右廊を通過して主室にかえり入口に向くと、入口上部の半円形の前壁に弥勒菩薩の兜率天説法があらわされている。このように修行僧は、釈迦の前世の本生から現世の涅槃に接し、さらに未来の兜率天浄土にもまみえることができる。現存するキジル石窟の中心柱窟主室前壁の弥勒菩薩像は一般に交脚像だが、それに照応すべき正壁の佛龕は、塑造の尊像がすべて失われているので、坐勢を知ることができない。しかし、第八〇窟(Hölenopfröhle)の主室正壁上方の半円アーチ形の壁面には眷属に囲まれた佛説法図が描かれており、その坐勢は交脚坐である。正壁と向いあう前壁上方の半円アーチの壁画は、現在は供養菩薩を残すのみであるが、以前は菩薩に囲まれた弥勒菩薩が描かれていた。⁽³⁴⁾第八〇窟の主室正壁上方の佛説法は、釈迦が地獄の情景を説く場面と考えられるので、交脚佛は釈迦佛であると推定できる。なおキジル石窟の中心柱窟主室ヴォールト天井側壁の菱形区画には、主として釈迦を中心

とした因縁説話を描いているが、結跏趺坐と交脚坐が往々にして交互にあらわされており、キジルにおける交脚佛の流行ぶりが推察される。交脚坐の坐勢を仔細に見ると、脚をわずかにおろしかけて地についていないものもあり、本来結跏趺坐から変形していった坐勢のようである。ガンダーラ彫刻では坐佛は一般に結跏趺坐であり、交脚坐はきわめてまれである。⁽³⁵⁾すると、敦煌莫高窟、雲岡石窟などの石窟と陝西省で一時行われた交脚の倚坐佛は、龜茲など西域地区佛教の造像形式の強い影響と考えられる。このように交脚佛の尊名については、弥勒佛と釈迦佛の二つの可能性があり、弥勒佛に限定することは必ずしも妥当ではない。

四

弥勒が兜率天から閻浮提に下生した後、龍華樹下で思惟に入り悟りを開いて「佛陀」になった姿が弥勒佛であり、唐時代には一般に倚坐佛であらわされた。莫高窟においても、北大像とよばれる第九六窟の三十三メートルの大佛、南大像すなわち第一三〇窟の二十六メートルの

大佛は共に弥勒佛である。⁽³⁶⁾さらに莫高窟では、唐代の則天武后期以降に「弥勒浄土変相」が流行し、その数は十七例に及んでいるが、弥勒浄土変相のうち龍華三会をあらわした弥勒佛はすべて倚像として描かれている。

弥勒佛を倚像であらわす例は、唐代では龍門賓陽南洞、惠簡洞、万佛洞等であり、いずれも造像記によって弥勒佛の尊名を確認することができる。また、唐代の造像碑に彫られた倚坐佛でも、銘文によりその根拠を求めることが可能なものはかなりの数にのぼる。

それでは、北朝に遡って倚坐佛を弥勒佛と認められるかという若干問題があるようだ。例えば、麦積山石窟の北魏後期に属する第一六三窟は、正壁に本尊結跏趺坐佛、右壁に倚坐佛、左壁に菩薩坐像を配し、現在、過去、未来の三世信仰をあらわしている。本尊が釈迦佛とすれば、右壁の倚坐佛は当然過去世の定光佛とすべきだろう。

そこで北朝期の単独如来像のうち、銘文によって弥勒像と特定できるものだけを、付表二に示した。ただ、こ

ある弥勒佛の単独像は、大部分が現在の河北と山東で制作したものに限られ、陝西の一点を除いて、山西、河南は遺例がなかったことである。それにしても、二十四例の弥勒佛のうち、立像が圧倒的に多くて十六例にのぼり、結跏趺坐像が五例、交脚坐像が陝西の一例、倚坐像もわずか二例にすぎない。少なくとも、北朝期における河北と山東では、造形のうえで弥勒佛は釈迦佛と区別されなかったことがわかる。釈迦と弥勒の性格の相似、すなわち下生後の弥勒が龍華樹の下で悟りを開いて成佛し、釈迦を継ぐという性格から当然のことであろう。

ところで、付表二によると、単独像の倚坐像は北魏の正光四年(五二三)になってはじめてみえる。敦煌では第二六八窟の北涼窟にあり、雲岡でも、天安、皇興年間(四六六―四七〇)頃に造営された第七・八窟に出現している。これからみれば、倚坐像の流行は西からはじまり、涼州の影響を直接受けた雲岡から華北諸地方に波及したのであろう。

では、雲岡にあらわれた倚坐像についてみよう。第七・八窟は双窟で、主室の正壁である北壁には上下二層

付表二 紀元銘のある単独像に見える弥勒佛の形式

銘文の尊名	年 紀	形 式	記 事	所 蔵	出 典
宛申發造(弥勒像)	北魏太平真君四(四四三)	金銅佛立像	弥勒下生。高陽郡曇首縣(河北省)		松、12、13(a)(b)
法亮造弥勒像	和平 元(四六〇)	金銅佛坐像			松、29(a)
韓令姜造弥勒像	皇興 五(四七二)	金銅佛立像	北平無終縣(河北省)		松、26
張寶造弥勒像	太和 二(四七二)	金銅佛坐像	河間郡成安縣(河北省)		松、35(b)
范壽造弥勒像	太和 六(四八二)	青銅佛立像	盤陽縣(山東省)	静岡、佐野美術館	大、186頁、松45(c)
李日光等造弥勒像	太和 八(四八四)	金銅佛立像	登州(山東省)		松、38(c)
道繩造弥勒像	太和 十(四八六)	金銅佛立像	(山東省?)		松、44(e)
弥勒佛像	太和 十三(四八九)	金銅佛坐像		書道博物館	松、挿8
王常兄弟造弥勒佛像	太和 十六(四九二)	金銅佛立像	高陽郡曇首縣(河北省)		松、46(a)
普賢造弥勒尊像	太和 廿二(四九八)	金銅佛立像	□生西方妙樂國土。肥如縣(河北省)	泉屋博古館	松、51、S、147A
弥勒像	太和 廿三(四九九)	白玉二尊佛立像	(河北省定興)	クリーブランド美術館	松、挿223
鄧道仙造弥勒像	永平 五(五一二)	金銅佛立像	平原縣(山東省)		平、6、277
劉保生造石弥勒像	六世紀前半	石造佛交脚像	(陝西省)	陝西省博物館	陝石、20
邑義二六八造弥勒像	神龜 三(五二〇)	白玉佛立像	(河北省曲陽出土)		故博、総2、1
趙雄造弥勒像	正光 二(五二二)	白玉佛立像	(河北省曲陽出土)		文參、194、9、45
張開造弥勒像	正光 二(五二二)	白玉佛坐像	(河北省曲陽出土)		故博、総2、2
鄒撥造弥勒像	正光 四(五三三)	白玉佛像	(河北省曲陽出土)		故博、総2、3
□午猷造弥勒像	正光 五(五三四)	金銅佛立像	新市縣(河北省)	メトロポリタン美術館	講中、3、20
道休造弥勒石像	孝昌 三(五三七)	石造佛立像	(山東省廣饒縣)	山東省広饒縣	文參、198、4、42
張白奴等造弥勒尊像	東魏天平 二(五三五)	石造三尊佛立像	高陽郡(河北省)	藤井有隣館	松、105
崇龍等造弥勒像	天平 三(五三六)	金銅佛立像	中山郡曲陽縣(河北省曲陽)	ベシルヴァナ大学美術館	講中、24
王聖娘造弥勒像	興和 三(五四一)	白玉佛立像	(河北省曲陽出土)		故博、総2、9

張慶賓造弥勒像	北齊天保	七(五五六)	白玉佛倚像	河北省曲陽出土
黃海伯達王弥勒像	天保	八(五五七)	白玉三尊佛坐像	河北省定省
出典の符号	松一松原三郎「増訂中国佛教彫刻史研究」		故宮「故宮博物院院刊」	
	大一大村西崖「支那美術史彫塑編」		文參「文物參考資料」	
	平六平凡社「六朝の美術」		講中「講談社「中国美術」	
			陝石「陝西省博物館蔵「石刻選集」	
			大阪市立美術館	故博 総2、26
			松 139(a)	

に龕が開かれている。尊像の形式は次のようになる。

ように推察すると、第八窟は上層が釈迦佛を中尊とし、左右に菩薩形の弥勒を配した形と解せる。

第七窟 上龕 弥勒菩薩 倚坐佛
交脚菩薩 下龕 二佛並坐
倚坐佛
思惟菩薩

第九・十窟も双窟であり、その本尊の形式は次の通りである。

思惟菩薩

協侍菩薩
第九窟 倚坐佛
脇侍菩薩

第八窟 上龕 弥勒菩薩 佛立像
倚坐佛 下龕 佛坐像
交脚菩薩 佛立像
思惟菩薩

第十窟 交脚菩薩
思惟菩薩

上下二層の龕に菩薩交脚像と二佛並坐像を配した例は第十七窟明窓東側にあり、太和十三年の銘文から、第七窟の場合も上段が弥勒菩薩、下段が釈迦多宝と知れる。問題となるのは弥勒菩薩の両側に配された二体の倚坐佛共に釈迦佛、或は釈迦佛と定光佛と解してもよい。この

第九・十窟の本尊は共に損壊し泥で補修している。共に堂々たる大佛であり、第九窟の倚坐佛は第十窟の交脚菩薩に照応する。交脚菩薩が弥勒菩薩なら、第十窟の倚坐佛は釈迦であらう。雲岡石窟にはこのような倚坐佛と

交脚菩薩の照応は、東西に向いあう佛龕にもみられる。交脚の釈迦佛と弥勒菩薩の照応は、キジル石窟でもみってきたが、雲岡では交脚の弥勒菩薩と一対で釈迦を表わすとき、好んで倚坐にしたようである。またこのような照応は石窟や四面像などに往々にして認められるところである。

北魏の倚坐佛の単独像として、河北省曲陽出土の白玉像の中に、正光元年(五二〇)の王女仁父母造釈迦像⁽³⁹⁾があるが、付表二にあるように、その後の二例は共に弥勒佛である。以上のように、北魏時代の倚坐佛を甘肅以東の遺例で考えると、釈迦佛をあらわすほか、弥勒や定光佛の場合もあり、一定しないが、北齊・北周の頃から倚坐佛は弥勒佛をあらわすことが多くなるようである。限られた地域の少ない遺例で結論づけることはさしひかえたいが、雲岡石窟などに表われた釈迦倚坐像と弥勒交脚菩薩の照応が、やがて弥勒倚坐像として固定していくのではないかと私はひそかに考えている次第である。

敦煌莫高窟での倚坐佛と交脚菩薩の照応は北魏窟に多く、西魏と北周窟には各一例あるだけである。北魏の塔

廟窟にその例をとると、方柱正面(東西)大龕の本尊倚坐佛に対し、交脚菩薩は一般に方柱の南北両面の上下層形龕につくられる。方柱上層の西面には、円券龕に禅定印の坐佛があり、下層の南・西・北面の円券龕にも禅定印の坐佛が置かれる(付表一参照)。南面は苦修像の場合が多い。禅定印の坐佛は、結跏趺坐し、禅定にはいっている釈迦の姿をあらわしている。このようにみていくと、方柱正面龕と下層の各龕は現世の釈迦佛の世界、上層は兜率天宮の弥勒菩薩の世界をそれぞれあらわすものであることがわかる。

北魏時代の莫高窟で行われた造像は、以上のように釈迦佛と弥勒菩薩の信仰を表明しているが、見逃すことができないのは第二五九窟の諸尊の構成である。

この窟の本尊は二佛並坐像だが、さきに、雲岡石窟で弥勒交脚菩薩像と釈迦多宝二佛並坐像を、上下の龕に照応させた例をみてきた。二佛並坐は『法華經』卷四、見宝塔品⁽⁴⁰⁾にみえ、過去世の多宝佛が釈迦牟尼佛の説く法華經を讃嘆すべく、塔中にあらわれ釈迦牟尼を迎え入れたという物語りである。二佛並坐像は雲岡石窟でさかんに

つくられ、六世紀に入っても龍門石窟、炳靈寺石窟などでも踏襲された。しかし、雲岡以前または同時期に造られた例は、敦煌莫高窟をのぞいてほとんど知られていない。また、ガンダーラはもとより、中央アジアにも遺例はない。

第二五九窟は、現存する北魏窟では最も早く、本尊の様式は雲岡初期に近い。西壁は中央部が方柱のように出ているが、方柱はつくらず、正面龕に二佛並坐像を置いている。よって、他の諸像は南北両壁の上下二層の龕中につくる。諸像の配置は付表一にみられる通りであるが、南壁は東部下半が大きく損壊しているの、完好な北壁で原状を想像することができる。下層龕では、本尊に近い側に説法相の坐佛、倚坐佛、禪定佛、上層龕には闕形龕を四龕並べて、交脚菩薩像と思维菩薩像を置き、過去、現在、未来の三世をみごとに統一している。

莫高窟北朝期窟の本尊として主流を占めた並脚の倚坐像は、隋に入っても、しばらく造像が続く。しかし、隋の第一期に属する窟では結跏趺坐像が増加し、倚像と趺坐像がそれぞれ半々になり、第二期の窟では、倚像がさ

らに減少する。その一方では、倚坐の菩薩像が出現する。水野清一氏によると倚坐の菩薩は弥勒菩薩であらわすという⁽⁴¹⁾。華北では北斉にはじまる倚坐の菩薩は、敦煌では隋の第二期にはじめて出現する。一方、倚坐佛の再出現は初唐の則天期をまたねばならない。そのときの倚坐佛は釈迦から弥勒に尊名を変え、上生信仰から下生信仰に変化しているのである。

* * *

道安は、つねに弟子の法遇等とともに、弥勒の前で誓いをたて、兜率天往生を願ったと『高僧伝』⁽⁴²⁾の道安伝にあるが、伝はつづいて、道安が死の前に異僧の来訪を受け、浴法を教示し、天の西北を手で払い雲を開いて兜率天の妙土を現わしたと記している。この記載は道安が歿した東晋の建元二十一年(三八五年)頃、長安では僧侶の間で兜率天浄土が信仰されるとともに、西北方の天上に兜率天があると信じられていたことを示す記載として興味ぶかい。ところで涼州では、張軌より後、支配者も世々佛教を奉信したことから、西晋末以来の中原の混乱

不安もあって、屬賓、西域から来華した外国僧が、敦煌、姑藏などの地に足をとどめ、前涼最後の支配者の張天錫の時(三六三—三七六年)には佛典漢訳と修禪の一大中心となっていた。張天錫は、亀茲王の世子帛延を扶けて、自ら『首楞嚴經』二巻などの大乘經典の訳出を協力するほどの奉佛者であったが、彼の支配下の升平一〇年(三六六年)に敦煌莫高窟が草創されたのも故なきことではあるまい。

東晋から北朝にかけて、僧侶の宗教生活のなかで、とりわけ禪業が重視された。なかでも敦煌は西域から中国に入る門戸としてさかえ、中原から修行のため杖策する僧が多かったと思われる。これらの僧が敦煌の禅窟で修行するにあたり、典拠となったのが鳩摩羅什訳の『坐禅三昧經』や『禪秘要法經』⁽⁴³⁾であった。

鳩摩羅什訳による『法華經』安樂行品のなかでも、「常に坐禅を好み、閑処に在りて、その心を撰むることを修せよ」と説いている。

修禪の僧は、窟の釈迦像の前で観相をくり返し行い、成就後の解脱を信じた。『禪秘要法經』巻下には、「若し

四衆ありて繫念法を修せば、此人は世々生くる所にて、離れることなく佛にまみえ、未来においては弥勒に値遇し、龍華初会に必ず先に法をきき、解脱の証を得べし」とある。また、『上生經』も次のように説く。「佛滅度の後、四部の弟子天龍鬼神にして、若し兜率陀天に生れんと欲する者あらば、当にこの観をなすべし。繫念思维せよ。」

このように禅観の実践は、兜率天往生を約束するものであった。また、『法華經』普賢菩薩勸発品は次のように説く。「いわんや(この経を)受持し、誦誦し、正しく憶念し、その義を解して説の如く修行せんと。若し人ありて、受持し誦誦し、その義を解せば、この人命終るとき、千佛は手を授けて、恐怖せず悪趣に堕ちざることをえ、即ち兜率天上の弥勒菩薩の所に往く。弥勒菩薩は三十二相ありて、大菩薩衆に共に囲遶せられ、百千万億の天女の眷属あり。而して中に生れん。かくの如き等の功德利益あらん。この故に智者は当に一心に自ら書き、若しくは人をして書かしめ、受持し、誦誦し、正しく憶念し、説の如くに修行すべし。」

敦煌の北朝の窟内部は、釈迦、多宝佛を置き、兜率天宮の弥勒菩薩をつくり、壁面には千佛を描いて、伎楽を奏する眷属の天女を配している。北朝期の莫高窟の荘厳はまさに『法華経』の世界を具現したものといえよう。

普賢菩薩勧発品は周知の通り世の末に『法華経』を支持し守護する功德を述べたものであるが、この経を書写し受持、読誦してその義趣を理解するものは、死後兜率天に生まれることを約束している。しかし、『法華経』の受持、書写、読誦はあくまでも釈迦佛を拝し供養するものであり、その中心は釈迦佛であることは自明である。

敦煌の北朝期の窟の本尊が釈迦佛であることは容易に理解されよう。

註

- (1) 史華湘「関于敦煌莫高窟内容総録」(『敦煌莫高窟内容総録』北京、文物出版社、一九八二年十一月)
- (2) 倚坐は台座に腰掛ける坐法で、並脚の坐法と交脚の坐法がある。ここでは慣例に従って、並脚を倚坐、交脚を交脚坐とすることにした。
- (3) サフリ・パロール出土、菩薩立像、パシャール博物館蔵。

- (4) モハammad・ナリー出土、釈迦説法、ラホール博物館。
- (5) 上原和「ガンダーラの弥勒菩薩像をめぐる諸問題」(『美学』第三十五回全国大会研究発表)『美学』一三九、一九八四冬。

- (6) 東髪、持瓶は、グルンヴェーデルによって弥勒菩薩という説が出され、その後、マイトレーヤと確認できる銘をもつ、クシャン朝マトウラー様式の持瓶の菩薩が出土したことから、一般に弥勒菩薩とされるようになった。(A. Grünwedel-J. Burgess, *Buddhist Art in India*, London, 1901, p. 188; J. Rosenfeld, *The Dynastic Art of the Kushanas*, Berkeley & Los Angeles, 1967, p. 231.)

- (7) 『ペーミヤーン』(樋口隆康編、京都大学中央アジア学術調査報告)Ⅲ本文篇、第二章壁画参照、京都、同朋舎、一九八四年。宮治昭「ペーミヤーンの仏教世界」(弘前大学哲学会『哲学会誌』第十九号)、昭五十九年四月。

- (8) Museum für Indische Kunst. (MIK III 8147)
- (9) Museum für Indische Kunst. (MIK I 87)
- (10) 沮渠京声訳『觀弥勒菩薩上生兜率陀天経』(大正蔵一四・四一八頁)
- (11) J. Meunier, Shotorak, *Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan*, X, Paris, 1942, fig. 48.

- (12) 雲岡第十七窟明窓東側の太和十三年造像記は次の通り。「太代太和十三年歲在己巳九月壬寅朔十九日庚申比丘尼惠定身患重患發願造弥勒多宝弥勒像三區願患消除願現世安隱戒行猛利道心日增誓不退轉以此造像功德逮及七世父母累劫諸師无邊衆生咸同斯慶」
- (13) 単独像の交脚菩薩にも弥勒の尊名のあるものがある。例えば藤田美術館像の北魏神龟元年(五一八年)銘金銅交脚菩薩像には、「造交脚弥勒坐像……託生四方妙楽国土蓮華三會与佛相隨所願如是故記之耳」とある。
- (14) 塚本善隆、水野清一、春日禮智「龍門石刻録」(『龍門石窟の研究』二四三頁)京都、昭和十六年。
- (15) 高田修「ガンダーラ美術における大乗的徴証——弥勒像と観音像」(『佛教美術』一二五号、十一頁、東京、昭和五十四年七月)
- (16) 前出、註(8)参照。
- (17) 佛倚像を五尊形式の中尊にしたとき、その両側に交脚菩薩、さらに半跏思惟像を配することがあるが、三尊形式の場合思惟像の中尊は、そのほとんどが交脚菩薩である。
- (18) 羅福頤「河北曲陽県出土石像清理工作簡報」、李錫金「河北省曲陽県修徳寺遺址発掘記」(『考古通訊』一九五五年第三期、北京)、楊伯達「曲陽修徳寺出土紀年造像的藝術風格与特征」(『故宫博物院院刊』総二期、一九六〇年、北京)参照。修徳寺址より出土した白玉像は二千

- 二百点、紀年銘あるものは二四七点と報告されている。
- (19) 大村西崖「支那美術史彫刻編」東京、大正四年六月、三二五頁。帝室博物館像の天保十年比丘惠祖等造龍樹思惟像。台座のみ現存する。
- (20) 鳩摩羅什訳『弥勒下生成佛経』(大正蔵一四・四二二頁)
- (21) 鳩摩羅什訳『弥勒大成佛経』(大正蔵一四・四二八頁)
- (22) 水野清一「中国の彫刻」東京、日本経済新聞社、一九六〇年、第九七図。松原三郎「増訂中国佛経彫刻史研究」東京、吉川弘文館、昭和四十一年九月、第二四、二五図。紀年銘の全文は次の通りである。台座背面に「皇興五年三月廿七日新成県民仇寄奴為父母造象一區願父母上生天上直遇諸佛下人間候王長者」左側に「清信士仇成侍佛時清信士女韓□□□供主寄奴佛主伯生薩主阿姫侍佛時□□□僧任侍佛時」右側に「韓雙侍佛時清信士女韓□□□□□」とある。
- (23) 高田修「ガンダーラの菩薩思惟像」(『美術研究』二二五号)昭和四〇年。蘭山順吉編『龍泉集好』Ⅱ、東京、蘭山龍泉堂、昭和五十一年、六二二図。
- (24) 例えば足が失われているが、ヴァルドシニヒットも同形式の菩薩を紹介している。E. Waldschmidt Gandhara Kutscha Turfan, *Eine Einführung in die Frühmittelalterliche Kunst Zentralasiens*, Leipzig, 1925, Taf. 1. Trauernder Avolokitesvara.

- (25) 陕西省博物館編陝西省博物館蔵『石刻選集』北京、文物出版社、一九五七年。
- (26) 陕西省博物館蔵『石刻選集』第二〇図、「弥勒造像」
- (27) 陕西省博物館蔵『石刻選集』第十六図、「弥勒造像」第二二図、「弥勒弥勒造像」。
- (28) 陕西省博物館蔵『石刻選集』第十八図、「弥勒牟尼造像」第十九図、「弥勒牟尼造像」。
- (29) 松原三郎『増訂中国佛教彫刻史研究』挿図一一六のA、B参照。
- (30) 水野清一・長廣敏雄著、京都大学人文科学研究所研究報告『雲岡石窟』京都、京都大学人文科学研究所、一九五三年、第八卷、第九卷本文、五頁。
- (31) 中国石窟編集委員会監修『中国石窟・キシル石窟』第一卷、東京、平凡社、一九八三年十二月、月報三頁キシル石窟内部名称参照。
- (32) 同右第二卷、第四三図。
- (33) A. Grünwedel, *Altbdhistische Kultstätten in Chinesischuristan*, Berlin, 1912, p. 95.
- (34) 佛陀耶舎共竺佛念訳『長阿含經』第十九地獄品など参照(大正蔵一・一一一中一一二七上参照)
- (35) I. Lyons & H. Ingholt, *Gandhāran Art in Pakistan*, New York, 1957, fig. 177.
- (36) 鄧健吾「敦煌莫高窟第一三〇窟大佛」(『国華』一〇五号、東京、国華社)
- (37) 段文傑「唐代前期の莫高窟芸術」(『中国石窟・敦煌莫高窟』第三卷、東京、平凡社、一九八一年)
- (38) 註(12)参照
- (39) 『故宫博物院院刊』総二期、五三頁、四図。
- (40) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(大正蔵九・三二頁)卷四、見宝塔品。
- (41) 水野清一「倚坐菩薩像について」(『東洋史研究』第六卷第一号)一九四〇年。
- (42) 慧皎『高僧伝』卷五(大正蔵五〇・三五三頁)
- (43) 魏收『魏書』卷一一四、釈老志
- (44) 僧祐『出三蔵記集』卷七、首楞嚴後記、(大正蔵五五・四九頁)
- (45) 鳩摩羅什訳『坐禪三昧經』(大正蔵一五・二六九)
- (46) 鳩摩羅什訳『禪秘要法經』(大正蔵一五・二四二)

(ひがしやまけん・成城大学教授)